絵はがきから草津温泉の景観を読む

関　戸　明　子

えりあぐんま　第 17 号　抜刷

群馬地理学会（2011年 7 月）

絵はがきから草津温泉の景観を読む

関戸明子（群馬大学教育学部）

Ⅰ．はじめに

日本において絵はがきが一般的に作られ，使われるようになるのは，1900（明治33）年に私製はがきの発行・使用が許可されたことに始まる。絵はがきの需要は，1904（明治37）年の日露戦争の勃発で，日本と大陸を結ぶ通信手段となり，さまざまな記念絵はがきが発行されたことで爆発的に増大した（細馬 2006，生田 2009)。これ以降，絵はがきの消費量と種類が劇的に増え，製造・販売が盛んになっていった。絵はがきには，記念絵はがき，美人絵はがき，事件絵はがき，広告絵はがきなどの多くの種類があるが，風景写真を印刷した名所絵はがきは，そのなかで主要な位置を占める。

絵はがきにはタイトルの記載があることがほとんどであり，写真の主題や場所を把握しやすいという利点がある。他方で，図書・雑誌のような書誌情報がなく，発行された年代を特定しがたいという問題がある。郵便として使われた絵はがきで消印が読み取れるものであれば，使用時期が特定できる。そうでない場合，発行時期を特定する手がかりとして，①宛名面の3分の1が通信文に使用可能となった1907（明治40)年，②宛名面の2分の1が通信文に使用可能となった1918(大正７)年，③宛名面上部に記載の「郵便はかき」が「郵便はがき」となった1933（昭和８）年という三つの画期があげられる。そして④第二次大戦後には「郵便はがき」の記載が左横書きになる（生田 2004，浦川 2008)。ただし，この手がかりは，発行時期を見分けるもので，写真の撮影時期を示すものではない。定番の画像が後にも繰り返し利用されることがあるため，注意が必要である（関戸 2010)。

絵はがきに関する研究は，1905年から1910年代初頭にかけて，1930年代，1980年代前後以降の三つのまとまりが観察できるが，全体としてみると基礎研究の部分がもろく，データ化の蓄積不足が大きな障害になっていると指摘されている（佐藤 1994)。現在では，絵はがきに関するさまざまな書籍や図録が出版され，博物館の展示資料として絵はがきが使用されることも多いが，そのデータ化を進めるための記録システムの整備はいまだ十分とはいえない。

近年の絵はがき研究の動向をまとめた浦川（2008）によれば，その研究の視点として，絵はがきの史料性・メディア性・プロパガンダ性，近代日本のアジア諸民族に対する「まなざし」，絵はがきによる歴史的景観の再現，日本の絵はがき文化・絵はがき産業といった点が提示されている。本稿では，絵はがきによる歴史的景観の分析に焦点をあてるが，従来の研究では，同じポイントの多くの絵はがきを時系列的に検証することは十分に行われていない。

そこで本稿では，明治末期から昭和戦前期に発行された草津温泉の絵はがきを取り上げて，画像を比較して時系列に整理し，歴史的景観の変遷を読み解くことを目的とする。以下では，宛名面の書式による区分のうち，①より前（1900-1907 年）をⅰ，①以降（1907-1918 年）をⅱ，②以降（1918-1933 年）をⅲ，③以降（1933-1945 年）をⅳとして，発行時期を示すこととする。ただし，本稿で用いる絵はがきには，宛名面に通信文の欄のないⅰの書式はない。

Ⅱ．写真帖と絵はがき

個々の絵はがきの画像の分析に入る前に，草津温泉という観光地を象徴する景観として，どのシーンが選ばれているのかを考察しておきたい。複数の写真を集成した写真帖は，その格好の素材であるが，草津では数点しか確認できていない。表 1 には，ほぼ同時期に出版された 2 冊の写真帖の内容構成を示した。浅間山，温泉街，時間湯の内部，西の河原，獅子岩，翁仙ノ滝，常布ノ滝，白根山噴火口といった写真が共通した内容となっている。全体としては，温泉街よりも周囲の景勝地の写真が多くなっている。また独特の入浴法である時間湯も，草津を語る上で欠かせない画像として取り上げられている。

なお，表 1 には同一の画像が絵はがきに用いられている事例を示した。三木（2008）は，明治・大正期の地誌写真帖の編纂では，世界はもとより，日本，さらには府県

表1　写真帖に収録された名所の一覧

富澤仙次郎（1913）『上州草津温泉写真帖』		日本温泉協会代理部（1914）『草津温泉名勝写真帖』	
○	浅間山の遠望		浅間山ノ噴煙
	草津市街	○	草津温泉市街：囲山公園白根神社ヨリ望ム（北ヨリ）
○	時間湯ノ内部(1)		薬師堂境内ヨリ望ム（南ヨリ）
	時間湯ノ内部(2)		日蓮堂境内ヨリ望ム（東ヨリ）
○	時間湯ノ内部(3)		湯畑（湯花採取所）
	薬師堂ヨリ囲山公園ヲ望ム	△	重ナル時間湯（白畑ノ湯，鷲ノ湯，地蔵ノ湯，熱ノ湯，松ノ湯）
	湯花採取所（通称湯畑）		時間湯ノ内部(1)（攪拌）
○	白根山頂ノ旧噴火坑		時間湯ノ内部(2)（灌注）
	常布滝		時間湯ノ内部(3)（入浴）
	鸚鵡岩		白根神社
○	雨ノ西ノ河原		薬師堂
	殺生山		日蓮堂
○	獅子岩	○	賽ノ河原
○	草津沿道証判ノ清流		氷谷
○	小蓋ノ池浮島		翁仙ノ滝
○	翁仙瀑		獅子岩
			小蓋ノ池
			常布ノ滝
			毒水
			蘆ヶ平ヨリ白根山ヲ望ム
			白根山噴火口

○は同一の画像が絵はがきにも使用されていること，△は組写真のうち鷲ノ湯のみ異同があることを示す。

表2　草津温泉の絵はがきのセット

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
名称	草津名所絵はかき	草津絵葉書	草津名勝御絵はかき	草津温泉	仙境の湯の町草津	草津温泉の名勝	上州名勝草津温泉	草津温泉名所	浅間・白根高原　草津名勝	霊泉と風光の楽郷草津の展望
	全景	草津町全景	草津温泉全景	草津温泉全景	草津温泉全景	草津温泉全景	上州草津温泉全景	湯ノ町全景 2枚続き	唄に名高き草津温泉	
	入浴場内部攪拌ノ光景（其一）		草津温泉時間湯（其一）	草津温泉時間湯（其一）	草津温泉時間湯（其一）	湯もみ唄節面白き時間湯	時間湯・湯もみ		時間湯の内部	時間湯
			草津温泉時間湯（其二）	草津温泉時間湯（其二）	草津温泉時間湯（其二）					
	入浴場内部（其三）		草津温泉時間湯（其三）							
		上州草津　湯の花酌取場　一名湯畑		湯畑及紀念塔		町の中央にある湯畑	上州草津温泉前広場		湯の花採取場（湯畑）	
	西ノ河原		西ノ河原（其一）	山上より西の河原を望む	西の河原	湯川の流れる西の河原	（西の河原）	西ノ河原	西の河原公園・西の河原のゆるぎ石	西の河原の湯烟
			白根神社	白根神社	白根神社	由緒正しき白根神社	（白根神社）	白根神社		白根神社・白根神社奥の院
	翁仙ノ滝		翁仙ノ滝	翁仙滝	嫗仙の滝・常布の滝	夏なお寒き翁仙滝	（翁仙滝）	翁仙ノ滝	翁仙の滝	嫗仙の滝
	獅子岩	殺生河原獅子岩	殺生河原の獅子岩	殺生河原の獅子岩	獅子岩（殺生河原）・猫岩		（殺生河原の獅子岩）	殺生河原の獅子岩・白根登山路ノ猫岩	獅子岩・登山すがた	獅子岩と猫岩
	白根山旧噴煙口	白根山噴火口		白根山新噴火口	冬の白根山噴煙・草津のユートピア	白根山上噴火口湯釜の壮観	（白根山噴火口）	白根山旧噴火口		白根山噴火口
	白根山ノ枯木							白根山上ノ枯木		
	白根山上弓池							白根山噴火口内部		
								白根噴火山湯釜ノ噴煙		運動茶屋より白根山の噴煙を望む
		浅間山	運動茶屋ヨリ浅間山ヲ望ム			見晴し美しき運動茶屋より浅間山の遠望	（浅間山の遠望）	鬼押出ヨリ見タル浅間山	浅間山の遠望と湯揉踊	
		上州草津温泉湯治帰り		薬師堂				祖師堂		ベルツ博士の頌徳碑
										地獄谷
										浅間高原鬼の押出し
										吾妻渓谷
書式	iii	iii	iii	iii	iii	iii	iii	iv	iv	iv

等の範囲でさえ，画像は既撮影写真の活用が基本であったと指摘する。草津においても,写真撮影の費用を節約するため,すでに撮影された写真の再利用がみられる。こうした同一の画像の使用は，絵はがき相互の関係においても認められる。

さらに,絵はがきには,袋入りのセットで販売されているものが多い。表２には，セットの名称とそれぞれの絵はがきのタイトルを示した。例えば，セットＣ「草津名勝御絵はかき」には,「草津温泉全景」「草津温泉時間湯（其一)」「草津温泉時間湯（其二)」「草津温泉時間湯（其三)」「白根神社」「西ノ河原」「翁仙ノ滝」「殺生河原ノ獅子岩」「運動茶屋ヨリ浅間山ヲ望ム」の９枚が収められている。このほか，湯畑や白根山噴火口の写真がセットに入る場合もあるが，温泉街，時間湯，周囲の景勝地という基本的な組み合わせは，すべてのセットで保たれている。これは写真帖とも共通している。

とくに白根山に関しては，草津町唯一の守護神たる白根神社の本体で，朝な夕な目の前にその雄姿を現し，一度は白根登山を果たしたいと思うのが常であり，往復５里，男はもちろん女にも子供にも１日の行程にはもってこいのコースで，立派なお土産旅行の一つとされていた（中村 1936)。それゆえ，白根山噴火口などの写真は，草津の名所として欠かせないものであったと考えられる。

また，セットＪには 1942（昭和 17）年４月 30 日宿泊記念のスタンプがある。この時期になると，以前にはなかった浅間山の鬼押出しや吾妻渓谷といった周遊観光地が含まれることに注目したい。昭和初期の草津温泉は，1926（大正 15）年の軽井沢と草津を結ぶ電気鉄道の全線開通や，1935（昭和 10）年の渋川・草津間の省営バス（鉄道省経営の乗合バス）の開業などを契機に，伝統的な湯治場の役割を残しつつも，一般の旅行客も多く迎える観光地へと変容した時期に当たる（関戸 2009)。自動車による移動が容易になったことで，周遊地の写真も絵はがきのセットに組み込まれるようになったのであろう。

なお，表２に示したセットは，古書店から袋付で入手したもので，旅先で使用した絵はがきがあれば,その分は欠落していることになる。温泉街の全景や西の河原，時間湯の湯もみ・かぶり湯・入浴の３枚組の一つを欠くものなどが，そうした事例と考えられる。以下，本稿に掲載の絵はがきは，すべて筆者所蔵のものである。

Ⅲ．湯畑周辺の景観

草津の温泉街を撮影するときの構図は,北北東方向から温泉街を俯瞰する眺めと，南西から湯畑をクローズアップしたものが多数を占める。その範囲の位置関係を示すため，1910（明治43）年編纂の『草津町郷土誌』付図をもとに図１を作成した。

ここでは温泉街の景観変遷を明らかにするため，個別の画像を読み取りやすい湯畑周辺の絵はがきから検討したい。多くの画像を比較した結果，時系列的に整理可能な８枚の絵はがきを図２に示した。

図２①の画像の中央に広がるのが湯畑で，温泉を流して湯ノ花を沈殿させ，それを採取するための湯樋10数本が架けられている。その奥に瀧の湯の屋根，右手に松の湯の共同浴場がみえる。湯畑の外周はブロックと木柵で囲われている。左手前には広告塔が立っているが，これは，表１の1913（大正２）年刊『上州草津写真帖』に掲載の写真で確認もでき，1914年と1916年発行の鳥瞰図にも描かれている。

図２②の画像になると，広告塔はなく，囲いの周りに多くの岩がみえる。湯畑の周囲には，大正期，田口与三郎が造成した高山植物園があった（くさつ昔がたり編纂会1993）。図２の②と③を比較すると，③において植物の増加が認められる。図２③の画像では，湯畑の右手に街灯があり，案内地図の看板が立っている。草津水力電気（株）の創立により電燈が使われるようになったのは1919（大正８）年であり（佐藤1938），街灯の設置はそれを反映していると考えられる。

図２④の画像では「徳川八代将軍御汲上之湯」の記念塔が主題となっている。これは徳川吉宗が草津の湯を江戸に運ばせて入浴したことを伝えるもので，現在，瀧の湯跡付近に移動されている（写真１）。記念塔には，「昭和五年六月元幕府家人中村熊太郎書」と刻まれているので，1930年６月以後間もなく建立されたと考えられる。これは，記念塔の写真が1931年７月発行の案内書に掲載されていることからも裏付けられる（水島1931）。また，右手の松の湯の奥に大東館，左手に桐山の二つの旅館がみえる。

図２⑤の画像においては，湯畑周囲の岩や植物がなく，高山植物園が撤去されたことがわかる。記念塔の奥にみえる桐山旅館は，板葺き石置き屋根の３階建てであるが，次の図２⑥の画像では，改装されて，屋根が入母屋造になっている。さらに湯畑の囲いが木柵から石柱に取り替えられていることに注

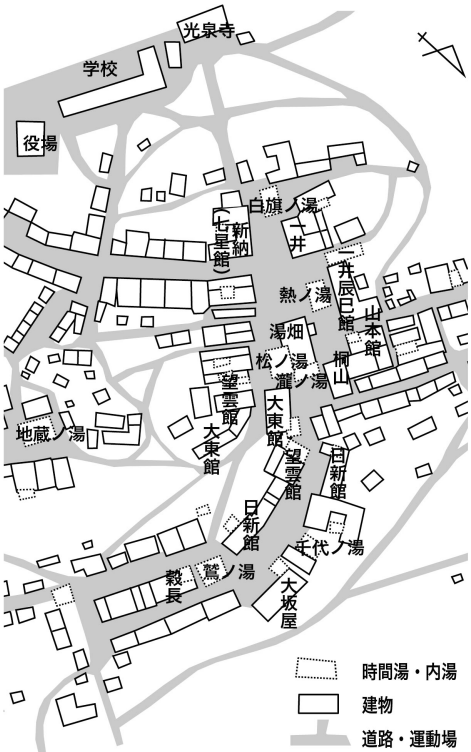
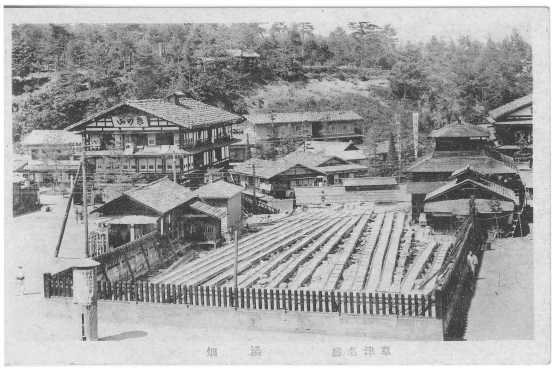


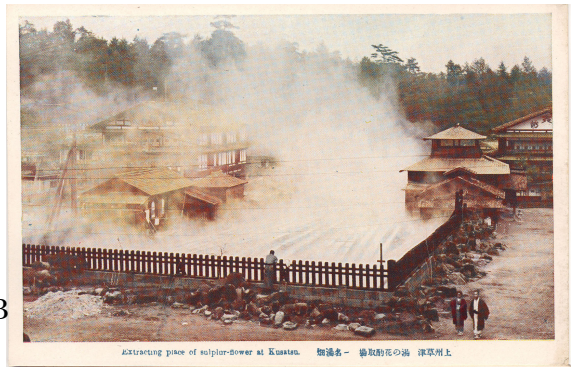
図１　明治末期の草津中心部
（『草津町郷土誌』付図より作成）

写真１ 湯畑の古い石柱と御汲上之湯記念塔

①
iii, X



②
iii, B



③
iii, X

④
iii, D

⑤
iii, F

⑥
iii, X

⑦
iv, I

⑧
iv, G

図2　湯畑周辺の絵はがき

ⅱ･ⅳは宛名面の書式，アルファベットは表２のセットを示す。ただしXは表２に含まれない。図３，図４も同じ。

目したい。この時期の古い石柱は湯畑の北東部に残されているが，その一つに「昭和九年八月草津町　旅館コモロ館　小林盛久」と彫られており（写真１），湯畑の囲いは，1934年に整備されたと考えられる。

図２⑦の画像をみると，湯畑の周囲に多くの乗用車が停車しており，記念塔の左手には，1935年に運行を始めたボンネット型の省営バスを確認できる。これはモータリゼーションの到来を強調した写真となっている。図２⑧の画像では，湯煙に隠れてわかりづらいが，右手中ほどに1936年に建て替えられた瀧の湯の屋根の一部がみえている。

Ⅳ．温泉街の全景

次に温泉街全景の絵はがきを取り上げる。写真撮影では鳥瞰図のような架空の高い視点は得られないため，草津の場合，ほとんどが白根神社の位置する囲山公園付近の高台から撮影されている。ここでは図３に示した７枚の絵はがきから景観変遷を読み解きたい。

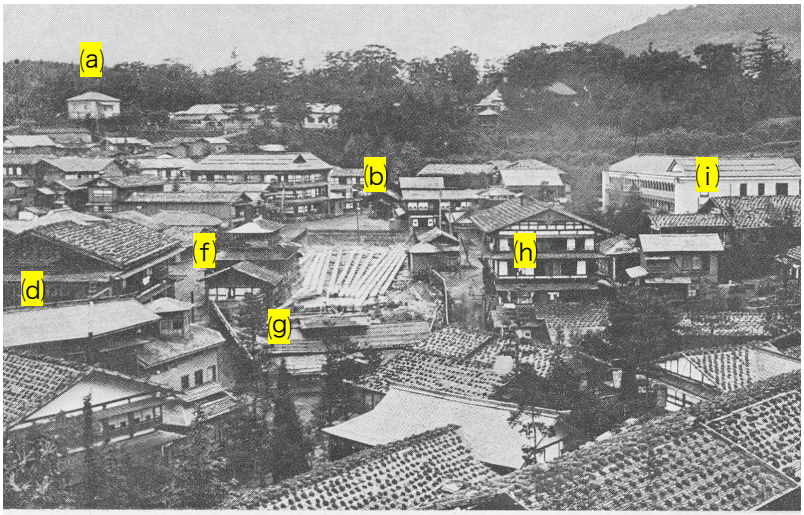
図３①は1908（明治41）年５月の大火後しばらくして撮影されたと判断できる。その基準となるのが『くさつ昔がたり』の口絵写真「明治末期の草津温泉街全景」である。この写真には1908年４月完成の草津町役場があり，５月の大火後に増築された一井辰巳館の建て増し部分がない。したがって，口絵写真は大火直前の撮影と推定できる。この大火によって，竪町から仲町の目抜きの場所，七星館から遠州屋までが焼失したが，望雲館は免れ，白旗の湯も焦げて焼け残った（佐藤1938）。口絵写真では，松の湯前に３階建ての旅館が建ち並び，前述の広告塔がみえる。さらに，1910年当時の温泉街を描いた図１にはない綿の湯も写っている。

一方，図３①の画像は，広告塔は残っているが，(e)の望雲館の向こうに３階建て

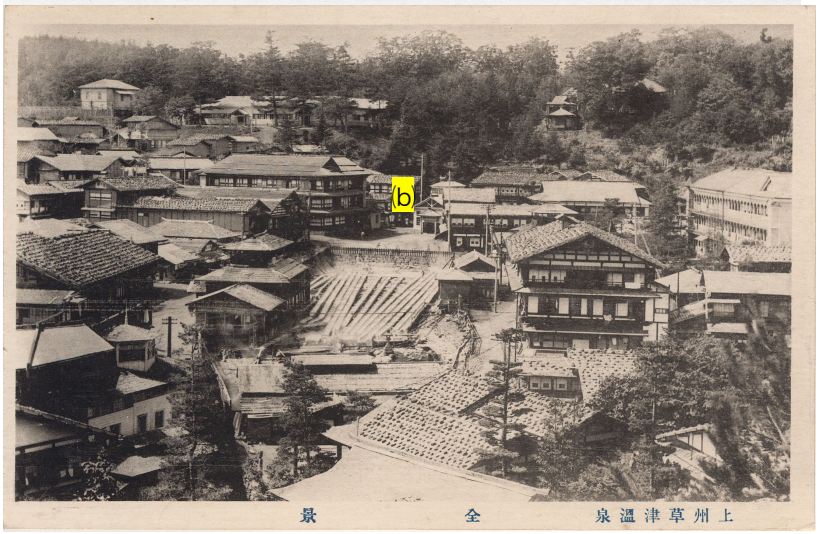
①
ii，X

図３　温泉街全景の絵はがき（その１）

②
一部拡大
iii，X



③
iii，A



④
iii，D

図3　温泉街全景の絵はがき（その2）

⑤
iii, F

⑥
iii, G

⑦
iii, X

図3　温泉街全景の絵はがき（その3）

の旅館がみえないこと，⒝の左手にある七星館の建物が新築されていることから，火災後の再建途上の温泉街を撮影したものと考えられる。⒜が草津町役場，⒝の下にある浴場が白旗の湯，⒞の左下が熱の湯である。草津町役場より右手の木々の間には，1904（明治37）年竣工で吾妻郡内屈指の大校舎と評された小学校がみえる（佐藤1938）。また，多くの建物が石置き屋根となっていたことが理解できる。

図３②をみると，湯畑の周囲に，白旗の湯⒝，松の湯⒡，瀧の湯⒢の共同浴場のほか，広告塔も確認できる。桐山旅館⒣の右手奥に一井辰巳館⒤がある。この旅館は，大きく洋風の要素を取り入れて３階建ての前面に連続するアーチをつけ，木部を白ペンキ塗りとした外観をもつ。一井辰巳館は，1907（明治 40）年に湯畑からみて左半分がまず建てられ，翌年の大火のあと右半分が増築された（伊藤 1984）。この画像ではＬ字型になった増築後の建物の形がわかる。

図３③の画像では，白旗の湯⒝が改修されている。広告塔がなくなり，多くの電柱が立っているので，電気の使用が始まった1919年以後の撮影と考えられる。図３④の画像になると，萩原旅館⒥，冨久住旅館⒦が建てられている。⒦の建物が鳥瞰図に描かれ始めるのは1922（大正11）年のことで，その前後の撮影であろう。

図３⑤の画像は，御汲上之湯記念塔が確認でき，湯畑の囲いは木柵であるので，1930年代初めの撮影といえる。⒧の建物が建設中であり，奈良屋旅館⒨が高層化している。さらに白旗の湯左手の旅館も大きくなっている。図３⑥の画像では，建設中だった⒧が完成して名古屋館となったことがわかる。その手前の建物が湯畑を囲う石柱に名称のあったコモロ館であり，桐山旅館⒣はまだ石置き屋根である。

当時の案内書には，近来乗合バスが著しく発達したために，東京はもちろん，近県各地から１泊の観光遊覧団体が続々と詰めかけるようになったので，旅館の建築や設備に一段の努力を払うようになり，旅館業は団体客本位と湯治客本位の二つの階層に分かれる状況にあると指摘されている（中村1936）。絵はがきからも，団体客用に旅館の大型化が進んでいたことが認められる。

図３⑦の画像になると，桐山旅館⒣が改装されているほか，左下に，これ以前の絵はがきでみえていた湯煙を抜く櫓を掲げた浴場が改築されて，屋上にオープンスペースが設けられている。さらに瀧の湯⒢が大きく変わっている。草津の共同浴場は，1936（昭和11）年に千代の湯と瀧の湯，翌年に熱の湯，松の湯，地蔵の湯が改築されており（佐藤1938），この絵はがきには改築後の瀧の湯が撮影されているといえる。瀧の湯はもともと打たせ湯であったが，当時は，草津の共同浴場のうち瀧の湯だけが１人２銭と有料で，源泉に若干の水を混ぜて温度を下げ，湯治が主眼でなく観光遊覧に来た客を迎えていたという。建築も新しく有料制度も新しい試みだけに，１泊の観光客や土地の有産階級に利用され，他の浴場のような混雑と不潔とがないと案内されている（中村1936）。

なお，図３⑦の宛名面の書式はⅲで，1933年以前の発行となるが，画像をみるか

ぎり1936年より後の撮影と考えられる。宛名面上部の「絵はかき」の「か」が変体仮名であるためであろうか。この点については，今後の検討課題としたい。

ところで，表２のセットＧのうち２枚を図２⑧と図３⑥として示したが，図２⑧の絵はがきで桐山旅館は改修済みであるのに対して，図３⑥はまだ石置き屋根となっている。このように同じセットで新旧の写真が取り混ぜて使われる場合もある。また，セットＢの「上州草津温泉湯治帰り」とセットＩの「登山すがた」は同じ画像であり，西の河原において，馬の背に櫓をかけて乗った女性二人，女児二人，馬に跨った男性一人，馬子三人の一行が撮影されている。発行時期の書式が異なる絵はがきに，同じ画像が用いられている例の一つである。

Ｖ．西の河原の景観

温泉街の西方に位置する西の河原は，多くの源泉が湧き出して湯煙を上げ，湯川となって流れている場所である。図４には発行時期の異なる３枚の写真を並べた。1908（明治 41）年発行の案内書によれば，西の河原は，温泉が至る所に湧出して渓流を造り，硫気に化成された種々の奇石が乱立している，処々に温泉を淀ませて湯ノ花を採取する小池が造られている，この河原にはお地蔵様が古くからあった，近頃は成田の不動尊の分霊が湯滝の上に立たせたまう，極楽亭という茶店があって真水の湯というただれ治しの浴場もある温冷水の遊泳所があり極楽滝もある，と紹介されている（萩原 1908）。

図４①は 1907-1918 年の発行である。これをみると，石像物が複数あって，左手の傾斜地には舞台のような構造物が築かれていることがわかる。この絵はがきでは背景に溶け込んでいて識別しづらいが，別の写真も参照すると，舞台の上には不動尊の石像物が置かれていることが確認できる。その形態からは，今日も西の河原にある不動尊と同一のものと判断される（写真２，右の円内）。これは上述の案内書に

写真２　現在の西の河原と不動滝

①
ii，X

②
iii，A

③
iv，H

図4　西の河原の絵はがき

ある成田山の不動尊の分霊であろう。

さらに別の写真では，舞台がより高く築かれ，そこに小祠を設けていることが確認できる。しかし，図４②では舞台が無くなり，石積みの上部から滝が流れ落ちるようになっている。現在の西の河原でも，石が積み上げられた不動滝の上に，不動尊の石像物が祀られているので（写真２），その原形がこの絵はがきに認められるといえよう。また，右の山の上には東屋が建てられている。

図４③は，①②よりも引いた位置から西の河原を眺めたもので，左手中ほどにみえる石碑は，1935（昭和 10）年に建てられたベルツ博士の記念碑であり，その建立後に撮影されたものとわかる。この画像になると，西の河原が公園として，遊歩道や東屋の整備が進んでいることが見て取れる。子供を連れて散策する家族の姿がそれを象徴している。

さらに，３枚の絵はがきを通してみると，背景となる山の植生の変化に気づく。明治末期ら大正初期には禿げ山であったが，植林によって次第に木々が生長していったことが理解できる。

Ⅵ．おわりに

本稿で試みたように，時期の異なる風景写真の絵はがきを検討していくと，既存の地域史に記述されていない事実を見出すことや，文書には詳細が記録されない具体的な歴史的景観の変遷をたどることができる。研究資料として，絵はがきのもつ魅力である。このように絵はがきを眺めることで，いろいろな発見があり，地理的想像力が喚起される。

本稿では，土産物として流通した絵はがきの画像に限定して分析を進めたが，それは，当時のマスメディアといえるほどに，絵はがきが広く普及していたからである。一方で，絵はがきの発行の始まった 1900 年以前の写真や，昭和戦前期の私的に撮影された写真などを考察に加えれば，写真からみた草津温泉の景観史について，より厚い記述が可能になろう。

浦川（2008）は，絵はがきには二つのメディア性があるとして，発行者（販売者）＝「特定の人・組織」から購買者＝「不特定多数の人々」への情報伝達媒体としての機能，差出人＝「特定の人」から受取人＝「特定の人」への情報伝達媒体としての機能を上げる。前者については，本稿において，風景写真の画像そのものに関する分析を行った。後者の，使用された絵はがきに記された書信の内容についても，当時の人びとの旅先での意識を探る資料として，今後取り上げる機会をもちたいと考えている。

［付記］

本稿は，群馬地理学会大会における「近代における温泉地の景観を読む―絵は

がきと鳥瞰図の活用」（2010 年 11 月）の報告をもとに，その後の成果を加えてまとめたものです。本稿の作成には，平成 21～23 年度科学研究費基盤研究（C），代表者・関戸明子，課題番号 21520789「メディア分析による近代日本におけるツーリズムの展開に関する研究」を使用しました。現地調査の際には，草津町立図書館の中沢孝之氏にご教示いただきました。お礼申し上げます。

［参考文献］

生田　誠（2004）『２００５日本絵葉書カタログ』里文出版
生田　誠（2009）『麗しき日本の絵葉書』日本郵趣出版
伊藤ていじ（1984）「草津の建築」，草津町誌編纂委員会『草津温泉誌　自然・科学編Ⅰ』草津町役場，409-454 頁
浦川和也（2008）「近代日本人の東アジア・南洋諸島への「まなざし」—絵葉書の史料的価値と「異文化」表象」国立歴史民俗博物館研究報告 140，117-163 頁
草津町誌編さん委員会（1992）『草津温泉誌　第弐巻』草津町役場
草津町（1910）『草津町郷土誌』手稿
くさつ昔がたり編纂会編（1993）『くさつ昔がたり』くさつ昔がたり編纂会
佐藤健二（1994）『風景の生産・風景の解放—メディアのアルケオロジー』講談社
佐藤曾平（1938）『草津町史』佐藤曾平
関戸明子（2009）「戦前期における鉄道旅行の普及と草津温泉の変容」，神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ』ナカニシヤ出版，16-25 頁
関戸明子（2010）「名所絵はがきを読む」歴博 158，7-11 頁
関戸明子（2011）「コモンズとしての温泉—草津における温泉の利用・管理の事例を中心に」，谷口真人編『地下水流動—モンスーンアジアの資源と循環』共立出版，222-243 頁
中川浩一（1990）『絵はがきの旅・歴史の旅』原書房
中村舜二（1936）『天下の草津温泉』大東京社
萩原太一郎（1908）『草津温泉』草津鉱泉取締所
橋爪紳也（2006）『絵はがき 100 年　近代日本のビジュアル・メディア』
細馬宏通（2006）『絵はがきの時代』青土社
三木理史（2008）「地誌と写真帖」，中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版，145-158 頁
水島芳静（1931）『温泉乃上州と其乃名勝』日本遊覧案内刊行会